

探究が蒔いた 未来の種

vol.2

島の高校と、ネットの高校。

高校生をアクションへ導いた共通点

—マイプロジェクトアワード常連校の舞台裏を探る—

考えたり調べたりにとどまらず、アクションに踏み出した高校生だけが挑戦できるマイプロジェクトアワード。文部科学大臣賞の栄冠をかけた熱戦が今年も決着しました。その舞台裏には、562プロジェクト2713人の高校生を支えた全国192校のドラマがあります。高校生はどんなときに自ら動き始めるのか？ そのヒントを探してみましょう。



認定NPO法人カタリバ
パートナー
今村 亮

1982年熊本市生まれ。東京都立大学卒。創業期からのディレクターとして、カタリバ事業、カタリバ大学、中高生の秘密基地b-lab、コラボ・スクールまじき夢創塾、全国高校生マイプロジェクト事務局を手がける。文部科学省熟識協議員、岐阜県教育ビジョン検討委員会委員を歴任。2019年に独立し「ディスカバ！」立ち上げ中。慶應義塾大学にて非常勤講師を兼務。共著「本気の教育改革論」(学事出版)。

ひとたび探究心に火が灯った高校生たちは、自ら動き始めます。00年代後半、首都圏では「学生団体」ならぬ「高校生団体」という潮流が生まれ、スーパー高校生たちの活躍が目立ち始めました。

そして今、走り出した高校生に追いつくかのよう国が動き始めました。新しい学習指導要領の実施に向け探究を軸とした教科再編が進む中、主体的な学びを高校生全体に押し広げることが求められています。はたして、授業から高校生主体のアクションは生まれるのでしょうか。

そのヒントを全国高校生マイプロジェクトアワードの7年間の足跡に探そうことにしましょう。過去の表彰歴をさかのぼると、毎年のように入賞する「常連校」が現れつつあります。コンスタントに生徒をアクションに導く常連校の現場には、一

体どんな仕掛けがあるのでしょうか？

なかでも本稿では東京都立三宅高校と角川ドワンゴ学園N高校に注目することにします。

島に守られているから、 生徒を送り出した

太平洋にぼつりと浮かぶ三宅島。人口は2489人。この島にひとつしかない高校が三宅高校です。2018年度の全校生徒は26人。生徒たちは農業科・家政科・普通科に分かれて学んでいるので、1クラス数人という環境です。

バドミントン部のミウさんは、たった3人の学級で学ぶ2年生。総合学習の授業から始めた「島つ子ゆめプロジェクト」で全国大会へと進みました。伴走したのは末吉智典先生です。

さかのぼること2014年、末吉先生はいきなりの辞令で三宅高校への赴任が決まります。これも公立教員の役目だからしょうがない。2〜3年を島でやり過ごそう、初めはそう思っていた末吉先生を変えたのは、当時の校長先生でした。このまま生徒減が続くと統廃合は避けられない。危機感をもった校長は、教員たちを島根県立隠岐島前高校への視察に連れ出したのです。

隠岐島前高校といえば、全国屈指の教育先端校。島ぐるみで県立高校の魅力化を応援し、全国・全世界から新入生が押し寄せる個性的な人気校に転じたドラマは、今や「島前の奇跡」として語られています。三宅高校も隠岐島前高校を目指せるのではないかと、校長はそう語りました。

末吉先生が悪戦苦闘しながら立ち上げた総合学習から誕生したマイプロジェクトは、都会の高校生たちに競り勝ち、2年連続で全国大会へ進むことになりました。その舞台裏を見てみましょう。

三宅高校の場合、1年生のうちには先輩のプロジェクトにどっぷりと触れます。ミウさんは先輩の取組に参加したり、プレゼンを聞いたり、全国大会の土産話を聞いたたりして期待感を募らせました。「やればやるほど楽しくなるよ」、先輩の言葉は輝いていました。

2年生になり総合学習が始まると、まずは自分自身のことをじっくり振り返る時間が待っています。悩んだ末にたどり着いた、ミウさんのテーマは進路でした。三宅島には小中高校どれもひとつずつしかありません。島の子どもたちは学校選

びを経験しないまま高校生になり、そして高校卒業後の進路に迷うことになりました。ミウさんはまさに進路に迷う当事者でした。

先輩たちにはこんな思いをさせたくない、ミウさんは鳥じゅうを駆けめぐり、多様な人生を歩む人を探します。島の大人たちはミウさんのことを小さな頃から知っているの、協力者はどんどん増えました。ついに小中学生に向け、先輩たちの体験談や勉強の大切さを伝える進路イベント「鳥つ子ゆめプロジェクト」の開催にこぎつけます。

「生徒の話聴くことが、とにかく大事。生徒は勝手に答えを得て、また地域に飛び出していきます」。末吉先生はそう語ります。「地域とは常日頃からコミュニケーションをとっているので安心。鳥だからこそそのやり方かもしれません」。学校と地域との信頼関係で生徒を支えているのが、三宅高校です。

顔を合わせなくても、 ネットでつながっている

一方、その対極にある常連校がネットの高校・N高校です。開校4年で急速に入学者を伸ばし、今や全国各地で全校生徒9727人が学んでいます。

N高校には、希望者が参加する「N高マイプロジェクト」というプログラムが用意されています。責任者は鈴木健さん。生徒はそれぞれ取り組みたいテーマを持

ち寄り、おのおのペースで企画・実行します。年末の最終発表会で学校代表に選ばれると、マイプロジェクトアワード地域ブロック大会へのチケットが授与されます。

障がい者スポーツに取り組んだのはタケルさん。2020年東京オリンピックパラリンピックに自分も参加してみたい。動機はそんな素朴な気持ちでした。

舞台裏を見てみましょう。金堂宏昭先生に尋ねてみると、入学して一年が経った時点でも、タケルさんと実際に顔を合わせたことはなかったといいます。不安はないのでしょうか。

「チャットツールで常時つながっているで、つまりいたときはすぐにメッセージします」。なるほど、ネットの高校の学びを支えているのは、ネットでつながっている信頼関係でした。いつでも先生に相談できる安心感さえあれば、離れていても動き続けることができます。「ただしネット越しだと、ぐっとモチベーションを引き出

すのは難しいんです」

タケルさんにとって、ターニングポイントは夏休みだったそう。プロジェクトを進められず行き詰まっていたころ、学校の勧めで参加したのが桜美林大学のサマープログラム。そこで他校の同世代、大学生、リオパラリンピックを経験した専門家と出会うことで、行動へと踏み出すようになります。そして始まったタケル君のマイプロ「2020意識改革」は、ブラインドサッカー選手に取材を申し入れるところから始まります。取材だけでは終わりません。横浜のブラインドサッカーチームに所属することを決め、一緒に練習し、小学校訪問のボランティアにも参加します。

そこで学んだのは「目が見えなくても人生を楽しめる」ということ。かわいそう、と思っていたタケルさんの気持ちが変わり始めます。今は「スポーツを通して障がい者のことを知ってほしい」と、健常者に

向けたブラインドサッカーの体験会を企画し始めました。

ハーバード大教授が提唱する 心理的安全性

島の高校とネットの高校、両極端のマイプロアワード常連校に共通しているのは高校生の安心感です。自分は応援されている、困ったときには受け止めてもらえるという安心感。Google社の職場環境づくりには、ハーバード大学のエイミー・エドモンソン教授が提唱した「心理的安全性」という考え方が取り入れられているといいます。両校の環境に通じるものがあります。

高校生のアクションが生まれる環境には何が必要なのでしょう。探究学習とは、答えのない暗闇へ生徒たちを誘う営み。そこから光を見出すために、まずは学校や地域の心理的安全性を確かめてみることは必ずや有効でしょう。



ネット上で開催されたN高ネットコースのマイプロ発表会 (2018年12月)



三宅島で開催したミウさんの進路イベント (2018年9月)



N高校
キャリア開発部PBL課長
鈴木 健さん



三宅高校
教諭
末吉智典先生

マイプロジェクトとは

高校生が地域や身の回りの課題や気になることをテーマにプロジェクトを立ち上げ、実行することを通じて学ぶ探究型学習プログラムです。マイプロジェクトでは、プロジェクトのテーマ設定に対する「主体性」と、たとえ小さくとも実際に「アクションを起こす」ことを大切にしています。

<https://myprojects.jp/>

※先生・生徒の所属・学年などは取材当時のもの